

紀

要

第 15 号

2002. 3

滋賀県文化財保護協会  
法人

## 甲 賀 寺 雜 考 (続)

畑 中 英 二

## 1. はじめに一問題の所在一

近年、信楽町宮町遺跡の発掘調査が進展し、平成12・13年には宮の中樞と考えられる建物の検出があり、紫香樂宮の所在地がほぼ確定した。また、宮町遺跡からは瓦の出土が殆ど無く、信楽町黄瀬内裏野に所在する「史跡紫香樂宮跡」と呼称される寺院遺構(以下、内裏野寺院遺構と呼称する)が、紫香樂宮ではなく甲賀寺である可能性が極めて高いと判断されるに至った。

ただし、甲賀寺はおそらく近江国分寺へ、または逸名の寺院へと変遷していったことが断片的な文献史料等からうかがうことが出来る。それ故、現在目にするこの出来るこの寺院遺構は近江国分寺もしくは逸名の寺院であり、原形が甲賀寺であったとしても、その伽藍をどの程度踏襲しているかについてが問題となる。この点が問題となる最大の理由は、

天平16(744)年に体骨柱の建てられた盧舎那仏の大きさにある。東大寺の盧舎那仏に先行して造像された甲賀寺の盧舎那仏は、巨大な仏像であった筈であるという先入観と体骨柱を建てたという記事から、東大寺並の大きさであったと想定されるが、内裏野寺院遺構の金堂跡には丈六程度の本尊を安置する空間しかない。そういった観点からみると、内裏野寺院遺構は甲賀寺のものとは別物であるという考え方も成り立ち得る。しかし、文献史料から見ると天平19(747)年に甲賀寺から持ち出された本尊とみられる三尊仏は、延べ164人で持ち出すことができる程度の大きさであること、(想像の域は出ないが)体骨立柱から1年後の天平17(745)年に仏師である國中連公麻呂が異例の昇進を遂げていることからそれを以て盧舎那仏原型が完成していたと考えると、甲賀寺の盧舎那仏は東大寺のそれよりもはるか

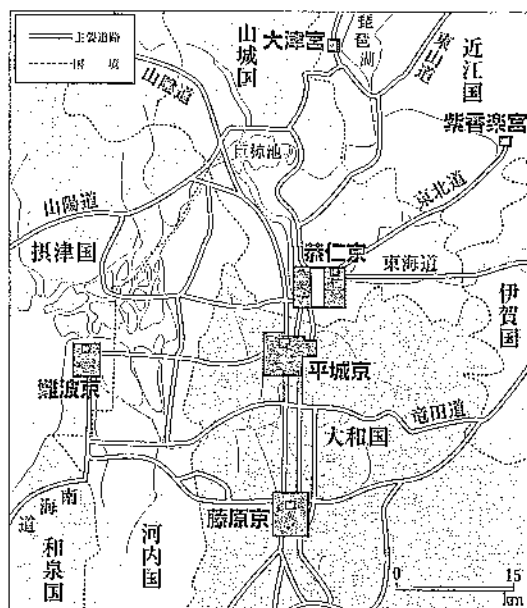


図1 古代都城の位置関係



図2 内裏野寺院遺構の位置

に小さかったと考えることも出来る。また、管見に及ぶ限り、体骨立柱についてわざわざ記したものは無く、聖武天皇が立柱式に立ち会ったことが着目される事柄であって、体骨柱を建てること自体は大型の仏像を作る際にはさして珍しいことでは無かったのではないかという点も指摘できる。<sup>(2)</sup> そういった観点からみると、ある程度の造作はあったものの、内裏野寺院遺構は甲賀寺の伽藍を基本的に踏襲しているという考え方も成り立ち得るのである。

本格的な発掘調査を行わない限り、上記の問題を解決することは困難であるが、現状でも検討しうる点が一つある。瓦からみた創建年代の類推である。内裏野寺院遺構からは肥後和男氏の調査時に塔・中門・鐘楼付近より一定量の瓦が得られており、その大半が山背国分寺単弁一七葉蓮華文軒丸瓦 KM05、均整唐草文軒平瓦 KH03 との同範関係が想定されている。<sup>(3)</sup> 量的に主体を占めるものが創建期のものであるとした場合、それらの年代を確定することにより、係る問題を解決する糸口が見つかるものと思われる。

そこで、本稿では内裏野寺院遺構の創建瓦とされる一群について、同範であると想定されている山背国分寺 KM05、KH03 をはじめとした瓦との比較から年代を類推し、甲賀寺と内裏野の寺院遺構の関係について言及を試みたい。なお、内裏野寺院遺構の北方約 1km の新宮神社遺跡からも少量ながら内

裏野寺院遺構出土瓦と同範のもの、同様の胎土の丸・平瓦が出土しているのでこれらも同様のものとして検討の対象としたい。

## 2. 研究史と問題点

### (1) 甲賀寺造営の経過

甲賀寺造営の過程及びその後の経過について、文献史料から僅かにうかがうことが出来るので、それについてみてみよう。

天平 15 年(743)10 月 15 日に紫香楽にて出された廬舎那仏造像の発願以降、同月 16 日の東海・東山・北陸三道の調庸を紫香楽に貢せしむという記事から、紫香楽における宮の造営は大いに進捗したとみられ、同月 19 日には紫香楽にて寺地を開いている。これが甲賀寺の寺地を示すものと考えるのが一般的である。また、寺地を開くと同時に、行基の勧進も開始している。

翌天平 16 年(744)11 月 13 日には廬舎那仏の体骨柱が建てられ、聖武天皇もその場に臨席しており、鑄造仏の骨組みが出来上がったこととなる。

翌天平 17 年(745)5 月の平城遷都後程なく後の東大寺にて廬舎那仏の造営が開始されるが、甲賀寺の造営は中断してしまったのではなく継続していたようである。同年 10 月には造甲賀寺所から 167 人分の公糧の申請がみられる他、天平 19 年(747)1 月 19 日には甲賀寺造仏所にて製作中の本尊と思われる三尊仏を金光明寺造仏官あてに移送する旨を記した文書が残されている。平城遷都及び東大寺に於ける廬舎那仏の造営開始、本尊と思われる三尊仏の移送という事態を迎えて、甲賀寺の当初の性格は変容したものと見られる。

天平勝宝 3 年(751)には「甲賀宮国分寺」という名称が出てくることから、多様な解釈の余地は残されているものの、この頃には近江国分寺となっていた可能性はある。

ただし、天平宝字 6(762)年の石山寺創建に関する正倉院文書の中に信樂故京の遺材を以て石山に法備国師を入れ奉るべき板屋を造る旨がみえており、国師が一国の寺務を検校するために派遣され国分寺に止住することを常例としていることを勘案すると、国分寺機能は 760 年台には信樂から移動してしま

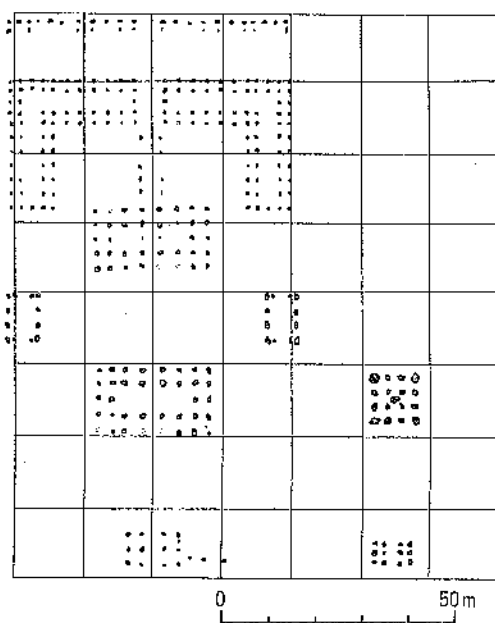


図3 内裏野寺院遺構の伽藍配置

ったのかもしれない。付言すると、内裏野寺院遺構からは平安時代前期の瓦も出土していることから、その頃までは法灯は守られていたと考えられており、<sup>(4)</sup> 国分寺機能が信楽にないことから逸名の寺院となったとせざるをえない。

現時点で知り得る甲賀寺の造営経過は以上のとおりである。

## (2) 研究史上の問題点

内裏野寺院遺構の発掘調査は昭和 5(1930) 年の肥後和男氏による調査により、礎石の位置が概ね把握された程度で、地下遺構の内容が把握されたとは言いがたい。また、上原真人氏による恭仁宮(山背国分寺)出土瓦の研究から内裏野寺院遺構出土瓦との同範関係が想定され、<sup>(5)</sup> 林博通氏による甲賀寺造営過程の検討から甲賀寺から山背国分寺への範の移動が想定されている段階にある。<sup>(6)</sup>

山背国分寺 KM05, KH03 型式は、セットとして用いられている。これらは、平城宮と同範・同文関係を持たない第三群軒瓦として位置づけられており、恭仁宮造営に際して新規製造された第二群軒瓦よりも後出し、山背国分寺の塔・講堂周辺からまともに出て出土するが、恭仁宮大極殿からは殆ど出土しないという特徴がある。このことから、天平 18(746) 年 9 月 29 日に恭仁宮大極殿が山背国分寺に施入されて以降、新たに建立した堂塔に用いられたものであると位置づけられている。それ故、甲賀寺出土瓦と山背国分寺 KM05, KH03 型式の比較を行うことによって、①同範関係の確認、②範傷の進行からみた新古の関係の確認、という以上の作業から両者の関係を推し量ることが可能となる。

ただし、内裏野寺院遺構出土瓦は、肥後氏の調査報告によると金堂院中門、鐘楼、塔周辺からの瓦の出土があり、先に挙げた KM05、KH03 と同範と考えられているものと、複弁六葉蓮華文軒丸瓦と恭仁宮(山背国分寺) KH05 と同文の中心に三角珠文を配する均整唐草文軒平瓦とが出土している。後者の組み合わせは、同報告によると中門及び塔周辺から「相当数」出土しているとされるが、現在見られるものとしてはあくまでも客体である。出土地点がはっきりしない点に問題があるものの、現在の瓦の編年観では後者の組み合わせは平安時代に下るもので

あるとされている。このことから前者の組み合わせを内裏野寺院遺構の創建瓦とみて問題ないだろう。筆者が行った測量調査によると、金堂院・塔院に対して、僧院の主軸がややずれ、割付方法も異なる可能性が指摘でき、<sup>(7)</sup> 二者に施工時期差が内在している可能性がある。この測量結果を踏まえるまでもなく、当然のことながら、どこで得られた資料であるかが問題になるのであるが、現状では詳細を推し量るすべもなく新たに調査を実施する機会もないので、その問題についてはひとまず棚上げして、山背国分寺出土資料との比較を試みる。

## 3. 瓦の検討

内裏野寺院遺構出土資料と山背国分寺出土資料との詳細な比較の前に、判明している点について述べておく。内裏野寺院遺構及び新宮神社遺跡出土資料は、胎土に長石・石英粒を多く含み、後世の信楽焼の雰囲気非常に似ており、山背国分寺出土資料とは明らかに異なる。それ故、両者は異なる地点の瓦窯で生産された可能性が極めて高いと考えている。

### (1) 軒丸瓦

軒丸瓦(KM05)については、中心蓮子の形状をきっかけに容易に同範であることを確認した。まず、線鋸歯文の状況から範傷の進行を確認できる可能性が高いと考えたが、内裏野寺院遺構出土資料に良好なものがなく、あきらめざるを得なかった。しかし、弁間が鮮明さを失い、徐々に広がっていくことと、弁間が広がっていく最終段階のものには中房に範傷が生じていることが確認できた。内裏野寺院遺構出土資料は鮮明で、恭仁宮(山背国分寺)出土資料はやや鮮明なものからそうでないものまでを含むことが判明したので、前者から後者への瓦範の動きを考えることが出来る。

### (2) 軒平瓦

軒平瓦(KH03)については、中心飾りの形状をきっかけに同範であることを確認した。まず、山背国分寺出土資料の中での検討を行った。既に指摘されていることであるが、KH03の外縁は二段のものと一段のものが存在する。両者共に同範であるので、範傷の進行についてみると、右側の外区蓮子が潰れていく過程を読みとることが出来た。二段のもの

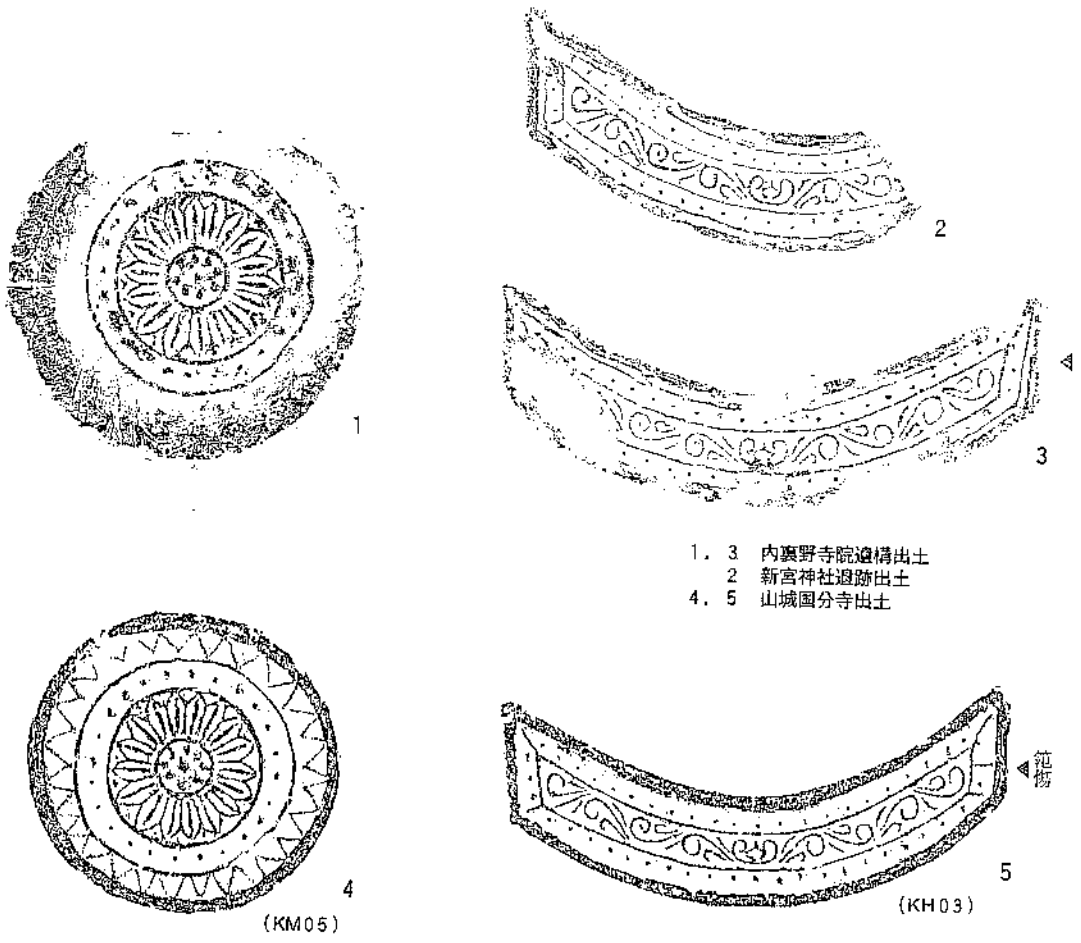


図4 出土軒瓦

のには既に潰れはじめているものが見えるが、一段のものには珠点が長楕円形になっている。そこで内裏野寺院遺構出土資料は、外縁は二段のもののみで占められ、当初の形状を残しているものから右側の外区蓮子が潰れはじめているものを確認することができた。以上のことから、KM05と同様に内裏野寺院遺構から山背国分寺への瓦范の動きを考えることが出来る。

なお、山背国分寺出土のKH03の製作の過程で製作技法の変化がみられるが、ここでは詳しく触れない。

(3) 丸・平瓦

恭仁宮大極殿から出土した平瓦の中で主体を占めるのはB群とされるものである。この種の平瓦は、凸面狭端部側の1/2～1/3の範囲の縄目を掘り(削り)消しており、特徴的である。山城国分寺塔跡から出土した平瓦の中で主体を占めるのはD群とされるものである。この種の平瓦は凸面縄目、凹面布目があり、いってみれば個性のないものである。

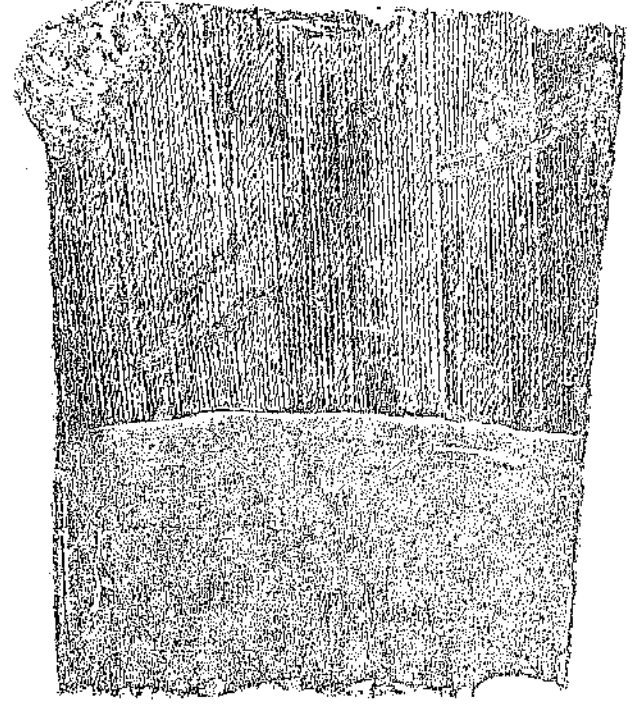


図5 恭仁宮大極殿出土平瓦B群

内裏野寺院遺構の塔・中門・鐘楼付近から出土した平瓦をみると、先のD群に類似するもので占めら

れる。一方、内裏野寺院遺構の北方 1km の新宮神社遺跡から、恭仁宮大極殿造営のために新調されたとする B 群と同様に凸面の縄目を削り取った平瓦が僅かに出土している。胎土は内裏野寺院遺構出土資料と同様であり、恭仁宮から持ち運ばれたものではないことは確実である。ただ、恭仁宮大極殿から出土する B 群は凸面狭端部の縄目を掘り消しているのに対し、新宮神社遺跡出土資料は凸面広端部を削り消している可能性がある。何れにしても、資料の増加を待って再検討する必要があるが、先の B 群平瓦との技法的な共通性を見出すことは可能である。

内裏野寺院遺構の塔・中門・鐘樓付近より D 群平瓦が出土していることから、複数系統の工人が存在し、建物毎に平瓦が異なっていた可能性も想定する必要が生じるだろう。

なお、丸瓦については山背国分寺出土資料は十分に特徴が見出されているとは言い難く、全体像が明らかではないことから、断片的な内裏野寺院遺構出土資料と比較することは混乱が生じかねないので、ここでは検討の対象とはしない。

#### 4. 瓦からみた内裏野寺院遺構の創建年代

以上の検討の結果、内裏野寺院遺構から山背国分寺への瓦範の動きを考えることが出来た。更には胎土に違いがあるので、内裏野寺院遺構の瓦を生産した工房と山城国分寺塔の瓦を生産した工房とは同時に存在し得ないことが確認できた。その点を踏まえて、瓦からみた甲賀寺の創建年代について検討を進めよう。

まずは、軒瓦からの検討を試みよう。

内裏野寺院遺構の創建瓦として用いられた KM05 は、圏線で囲んだ中房に 1 + 8 の蓮子を置き、外区内縁の珠点が 24 個であること、外縁は直立縁であるにもかかわらず線鋸歯文を巡らせている点から恭仁宮 KM01 を模倣したものであると考えられている。同様に KH03 は、中心飾りを C 字上内向に花頭文を垂飾すること、左右にやや異なるが蕨手三葉を四反転させる点から恭仁宮 KH01 を模倣したものであると考えられている。ちなみに恭仁宮 KM01.KH01 は大極殿地区での主要軒瓦であり、恭仁宮造営期である天平 12 ~ 15(740 ~ 743) 年

に新調されたものと考えられている。とすると、内裏野寺院遺構の創建瓦は恭仁宮 KM01.KH01 の模倣であることから、それらは天平 12 ~ 15 年を遡ることは考えがたい。なお、甲賀寺の寺地を開いたのが天平 15 年であることから、そこで問題は生じることなく、内裏野寺院遺構創建瓦の上限は天平 15 年と考えるのが妥当であろう。

内裏野寺院遺構創建瓦と山背国分寺 KM05.KH03 は同範であり、前者が先行することが先の検討によって判明した。先に述べたように、山城国分寺 KM05.KH03 は、天平 18(746) 年 9 月に恭仁宮大極殿が山背国分寺に施入されて以降、国分寺所用瓦として生産されたものの一群であることが判っている。国分寺への施入以降どれくらいの年月を経て塔が建立されたかを推し量る術はないが、大きく隔たることはないと考えておきたい。とすると、天平 18 年 +  $\alpha$  を内裏野寺院遺構創建瓦の下限とすることが出来る。ただ、ここで問題になるのは +  $\alpha$  を何年間に見積もるかである。残念ながら山背国分寺関係の文献史料は暫く途絶し、造営過程を追うことは出来ない。

以上の点から内裏野寺院遺構の創建瓦は天平 15 年を上限にするものの、下限を設定することは困難であることが判明した。

そこで、平瓦についてみると、恭仁宮大極殿造営のために新調されたとされる B 群と全く同じものではないが、同様の技法を持つものが僅かながらみられる。この種の平瓦の存在を積極的に評価した場合、先の軒瓦のモデルとコピーの関係及びその年代観からみると、推測の域を出ないが、恭仁宮大極殿所用瓦の生産にあたった工人は、後に内裏野寺院遺構所用瓦の生産に従事したことは選択肢の一つとして提示することが出来る。他の分野においても恭仁宮造営工人群が紫香楽宮造営に割かれているようであり、先の想定は十分に考えられる。

文献史料からは先述した事柄以上の情報を引き出すことは難しいものの、瓦当文様の強い親縁性と平瓦の技法の共通性から、両者の間にさほど時間差を考慮する必要はないのでは無かろうか。とすると、天平 15 年からさほど時間をおかずに内裏野寺院遺構所用瓦の生産が始まったと考えることも出来る。

これらの瓦は内裏野寺院遺構で主体を占める創建期のものであることから、一般的にはある程度の造作が加えられている可能性はあるとしても、内裏野寺院遺構は甲賀寺を原形としている可能性は高い。

間接的な根拠ではあるが、以上の様な推論を提示することが出来た。東大寺級の大きさの盧舎那仏造像構想が、甲賀寺における盧舎那仏造像計画・実行の時点から既に存在していたか否かは、推し量るべくもないが、資金的・技術的な裏打ちを得て、盧舎那仏造像構想が肥大化した可能性も選択肢の一つとして提示しておきたい。

## 5. おわりに

瓦の検討から、内裏野寺院遺構が甲賀寺を原形とするという一つの考え方を提示したが、この考え方には一つの問題が内在している。ここでは、瓦によって年代観を導き出しているが、瓦には作範の年代、瓦製作の年代、瓦を葺いた年代があることから、直接的に寺院遺構の創建年代を示し切れない側面があるのだ。甲賀寺において、瓦製作と瓦を葺いた年代が隔たっていた可能性はないだろうか。甲賀寺の寺地が天平15年に開かれるが、その時点で瓦が製作され始めたものの、天平17年の平城遷都の時点で大規模な設計変更があり、近江国分寺として作り直されたと考えることはやや難しいと思われるが、可能性を全否定するまでには至らない。

先に述べたように、内裏野寺院遺構の測量調査の結果、金堂院・塔院と僧院造営との間に施工時期差がある可能性を想定できることから、この遺構が甲賀寺を踏襲していたとしても複雑な過程を経ていることは想像に難くない。

資料が十分ではないことから、未だ多様な解釈の余地があることは否めない。ただ、考古資料から言及する余地が殆ど無かった状況からは脱することが出来たのではないかと考えている。今後の資料の増加及び活発な議論を期待しつつ稿を結ぶこととする。

甲賀寺出土瓦と山城国分寺出土瓦の同範関係の確認作業については、有井広幸、森正、森下衛（京都府教育委員会）、肥後弘幸（京都府立山城郷土資料館）、辻川哲朗、細川修平（滋賀県文化財保護協会）、島軒満（信楽町教育委員会）氏および畑中が

参加し、信楽町立雲井小学校、信楽町教育委員会、京都府立山城郷土資料館のお世話になった。同範関係確認作業参加の諸氏ならびに榮原永遠男（大阪市立大学）、林博通（滋賀県立大学）、森郁夫（帝塚山大学）の諸先生には種々御教示いただきました。ご芳名を記して謝意を表します。

## 註

- (1) 前田泰次「盧舎那仏鑄造」『新修 国分寺の研究』第一巻 吉川弘文館、1986
- (2) 畑中英二「甲賀寺雑考」『紀要』第14号、滋賀県文化財保護協会、2001
- (3) 肥後和男「紫香樂宮趾の研究」『滋賀県史蹟調査報告4』、1931
- (4) 林博通「甲賀寺跡」『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会、1989
- (5) 上原真人『恭仁京跡発掘調査報告 瓦編』京都府教育委員会、1984
- (6) 前掲4) 林論文
- (7) 前掲2) 畑中論文

編集後記

本号では、縄文時代から古代にいたる7編の論考を掲載することができました。時代はやや古い方へ偏っていますが、中身は環境に関するものや、土器論、個別の遺跡にかかわるものなど多岐にわたったものとなっています。これらの論考が、私たち埋蔵文化財の調査に携わる者の一助となり、さらに文化財の保護・普及啓発活動の一翼を担っていくことを願っています。 (☆)

平成14年(2002年)3月

紀 要 第 1 5 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2  
Tel (077)548-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社  
大津市札の辻4-20  
Tel (077)523-2580 Fax(077)524-6668